俺が理想の主人公 -魔術と科学編-

ふぉんふぉん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺が理想の主人公　－魔術と科学編－

【Ｎコード】
Ｎ９２４７Ｚ

【作者名】
ふぉんふぉん

【あらすじ】
他人を庇ってテンプレ的に死んでしまった主人公が、テンプレ的に神っぽいやつに会って、テンプレ的に転生、憑依、などするお話。
転成、憑依するにあたって主人公は力をもらった。
そしてもらった力とともに様々な世界を生きていく物語。
自己解釈、ご都合主義などの要素があります。

※当作品はその第一世界です。

プロローグ

「やっとここまで来たか。いや～長かった、ホントーに長かった。はぁ…」

その少年はそんな言葉とともに溜め息を吐いた。
溜め息はいままでの苦労を語るかのように深く、重いものであった。

「でも、ようやく始まるんだよな。」

そのように独り言をつぶやく少年がいるのは「学園都市」と呼ばれる場所である。
「学園都市」とは人口東京西部に位置し、東京都のほか神奈川県・埼玉県・山梨県に跨る完全な円形の都市。
総面積は東京都の約3分の1に相当する巨大都市で、総人口は約２３０万人。
そしてその8割は学生によって構成されている。
外周は高さ5ｍ・厚さ3ｍの壁に囲まれ、完全に外部と隔離されている。
そしてここの学園都市において学生たちが行っているのは、能力開発である。

「ここでどんなふうにやっていこうかな。並行世界というからにはあいつに言われたとおりに違いはあるんだろうけど…まあ、そんなことは今はいいか。」

少年からつぶやかれた「並行世界」という単語が、この少年が普通でないことを物語っている。

「それにあいつもいってたしな、楽しんで欲しいって…」

あいつというのもどこか遠い所にいる人物というよりは、もっと別の何かを感じさせるような口ぶりであった。

「…まあ、こんなことごちゃごちゃ考えてたら楽しめるものも楽しめないよな。やっぱ自分が思うままに過ごさないとな…。」

そうつぶやくと少年は学園都市の町を歩き始めた。

その表情にはこれからへ期待のためか、満面の笑みであった。

この少年、旧名、日野井（ひのい）　慶（けい）は新しい道を進み出した。

これからの未来に胸踊らせながら…上条当麻として。

プロローグ（後書き）

初めまして、ふぉんふぉんと申します。
いままでは作品を見る側だったのですが、今回、自分の作品を投稿させていただきました。こんな駄文でも楽しんでいただけたら幸いです。

さて、今回はプロローグということで結構短めにいたしました。
ですがこれはこの作品の導入ということで主人公がこのようになったあらすじを次回、プロローグ2という形で投稿したいとをもいます。
このあとの続くもなるべく早く投稿いたしますので今後とも宜しくお願いします。

プロローグ2

ｓｉｄｅ：当麻（慶）

やあ皆さんどうも。わたくしは旧名、日野井（日野井）　慶（けい）こと現在は上条当麻と申します。

自分この世界に来てから１５年、ようやく学園都市に来ることができたわけです。

これまでのことを思い返してみると、いろいろ苦労したな～と思います。

なにがあったかと言いますと右手が原因で発生する不幸の数々。

同年代のやつからはいじめのような物を受け、その親たちからも軽蔑の視線を受け、その他にも数えきれないほどの嫌がらせを…という具合に本当にろくなことがなかった。

だかそれもここに来たことで無くなる。なぜならこの学園都市は異常（アブノーマル）こそ普通（ノーマル）だからだ。

アブノーマル万歳！！！最高？？……

……調子こいてすんませんでした。

さて、そんなことはとりあえず一旦　ＳＯ・ＧＥ・ＢＵ　しておいきましょう。

ところで、画面の前の皆様にはなぜわたくしが上条当麻になっているか説明してませんでした。

サーセン。

というわけでここで一度、回想をした方がいいんじゃなかろうかと思います。

え？そんなのめんどくさい？プロローグ二回もやってんじゃねーって？

ハッ、いいぜ、お前らが回想も見ずに本編を読もうってゆーなら、

まずは、その幻想をぶち殺す！！！！！

はい、つーわけで回想です…

…

…

…

…

「…あれ、ここどこだ？」

俺が気がつくとそこはどうにも見覚えのない場所だった。
周りを見渡しても白一色。上下前後左右、すべてが真っ白。

というか、こんなとこに見覚えのあるやつなんかいないんじゃないかとすら考えてしまうほどだ。

「でもなんでこんなとこにいるんだ？」

それが疑問だった。
だからここで自分の最後の記憶をおもいかえしてみると…

…？そうだった！俺は確か工事現場の近くを歩いていて、そしたら突然上からガシャン？という大きな物音とともに鉄骨の雨が降ってきたんだ！

でもそれは俺に当たる軌道じゃなくて俺の前方にいる女性に当たりそうだったんだ。

そして、危ない？って思った時にはもう体が動いていた。

俺は女性を突き飛ばし、代わりに自分が鉄骨の下敷きになった…はず？

でも俺には意識があるし助かったのか？

仮に助かったとしたらここは…

「…病院、なのか？」

いやそんな分けないと思い直す。

普通に考えて鉄骨に下敷きにされて生きてる訳がない。ほぼ確実にだ。

だがそれだと自分に意識がある説明がつかない。それじゃあ何だ？と思っていると…

「お主はあのまま死んでたよ」

声が聞こえた。

それと同時に、ああ、このパターンはもしかして、とも思った。

声が聞こえた方向に振り返ると、俺の予想を肯定するかのようにいかにも神って感じの爺さんと女神って感じの美人がいた。

「あんた、神ってやつか？」

「うむ、因みに名前はゼウスという」

「ふぅん、んじゃあその神様がこの場所に俺を連れてきたんだろ

？俺に何のようだ？」

「お主にはな、転生をしてもらおうとおもってな。」

やっぱりこうなるか。

というか死んで、訳のわからないところにいて、神っぽいやつに会ったら転生だよな。

テンプレだなテンプレ。

「でも何で俺なんだ？他にも人間なんかいろいろいるだろ？」

「それについてはな、お主はあの時に近くに居たやつを庇って死んだじゃろ？
んでそやつがたまたまいろいろと調査のために下界に行っていた神だったのじゃよ。
神じゃったら別に鉄骨に下敷きになる程度じゃ死にゃせんのじゃが、そのままじゃとちと不憫に思っての、転生させてやろうということになったのじゃよ。」

ってことは俺はあれか、無・駄・死・にってやつか？
うわ～ないわ～ｏｒｚ

「あ、あの…」

俺が思わずｏｒｚになっていると声がかけられる。
そちらの方を地に手をついたままに見上げると神と一緒にいた女神っぽい人だった。
というかよく見てみると何処となく俺が庇った神ってやつに似て

なくもない気が…

「あの、私の不注意のせいであなたを死なせてしまってすいませんでした！」

どうやら本人だったらしい。

「…まあ、しょうがないですよ。起こってしまったことはもうどうしようもないですし気にしなくていいですよ。」

「えと…怒ってないんですか？」

「別に怒ってないですよ。
それに女性を庇って死ぬなんておれにとってある意味に本望みたいなもんですから。
だからそんな悲しそうな顔しないでください。
あんたは美人なんだから笑ってた方がいいですよ。（ニコ」

そして言葉とともに頭を優しく撫でてやる

「っっ！／／／はいっ／／／あ、私の名前はアテネっていきます／／」

俺の言ったことに満面の笑みとともに返事を返してくれたアテネ。
たださっきと違い顔を赤らめているのはなんでだ？

「…これがニコポ、ナデポ、鈍感、天然というやつか…」

「なんか言ったか？神さん」

「いや、なにも」

神がなんか言ったような気がしたが小さくて聞き取れなかった。
なんだったんだ？

「さて、では話もついたようじゃしそろそろ本題に入るとするかの。お主が転生するのは漫画やアニメの世界となるのじゃがあくまで平行世界じゃ。なにかイレギュラーな事態が起こるやもしれん。そこでこちらからもそれに対抗するための力なんかを授けよう。お主に授けるのは、まあ、仮に名前を付けるとしたら『あらゆる事を極める程度の能力』じゃな。これは主に強化と可能性に満ちた能力でな、思考錯誤する事によってアニメなんかの技も使えるようになったりもできる。あとこの能力により限界がなくなり極め続ける事も可能じゃ。」

わーい、それなんてチート？
ぶっちゃけ強すぎね？もうこれで十分だろ。

…でもどうせだったら俺がもらいたかった物がもらえたらよかったな。
俺だっていままで生きて来てこういう展開を夢見た事なんていくらでもある。
だから自分の考えた力をもらいたかった。

「んーそうか、なら一つだけお主の考えたものを現実としてやろう。」

「あれ？こころ読まれた？いやそれよりも現実にしてやろうって、マジで！よっしゃー？神テラ太っ腹！」

いやーめちゃくちゃ嬉すぃーです！
とするとどの能力にしようかな～迷っちゃうけど…よし、アレにしよう。

「俺が望むのは名前を付けるなら
『理想の主人公設定で転生する程度の能力』だ。
まあ、説明すると転生、憑依するに当たって理想の設定を着ける事ができる。
例えば、ど〇えもんののび〇くんに転生するとしよう。の〇太くんがバカなのはみんなの知ってるとおりだろう。
そこでこの能力の出番だ、もし俺がの〇太くんが天才だったら？と考えた設定があるとしよう。
そして俺がこの能力をもっての〇太くんに転生したら、考えたとおりに天才になっているというわけだ。」

はいチートです自重はしませんサーセン。

「あいわかった。それじゃ能力を付加しよう。ぶるぁぁぁあ？」

とそんな若本的な掛け声とともに俺の中で何かが変わったような気がした。

テテテテーン！
というなんかＬｖが上がったようなＢＧＭとともに『慶は能力を手に入れた』というのが頭に浮かんだ。
当然スルーである。

「これで能力は与えたぞ。では早速平行世界へ送ｒ「あ！ちょっとまって？」…なんじゃ？」

「行く前にあんたからもらった能力でどの程度のできるか試したいのと研究がしたいんだけど、問題ない？
向こうに送られてからだと試す機会がなかなかなさそうだし、何より見つかったらややこしい事になりそうだから…」

「…それもそうじゃな。そういう事ならわかった。それじゃあアテネ、めんどうを見てやってくれ。私は戻る。お主も次の世界、楽しんでくれ。」

「はい！よろこんで！よろしくお願いしますね、慶さん。」

「ああ、よろしく。」

…
…
…
…

…回想終了！
いや～長い回想だった。
まあ、そんな経緯があって今の俺があるわけなんですよ。
そしてアテネとても良くめんどうを見てくれた。
ホントに2人には感謝感謝だ。

ただ、アテネがこちらを頬を赤らめてなにも考えてなさそうな目で度々見てくるから、なんなんだ？とは思ったけど。

まあそれはおいといて、研究を終えてコッチに来た時は本当に苦

労したよ。
自我のある俺に対して母乳とかオムツとかマジで恥辱以外の何ものでもなかったよホントに。
そしてだんだん慣れていく自分が怖かった。
人間の適応能力とは恐ろしいものだ。

まあ、そんなわけで上条当麻に転生してからようやく１５年、やっと学園都市デビューを果たしましたわけです。

これから厄介事に巻き込まれる訳だが、
ＡＬＬ　ＨＡＰＰＹ　ＥＮＤ？

これを目標に日野井　慶、改め上条当麻はそげぶしまくる！

さて、まずはトキワに生息するＬｅｖｅｌ５の電気ネズミをゲットしにいこうかな？

そんなわけで、じゃあな

プロローグ2（後書き）

プロローグ2少し遅くなってしまいました。すいません。
今回は書く事が多くてやや適当になってしまったかもしれません。

さて、次回は主人公設定かな？と思っております。
次回もよろしくお願いします。

主人公設定

転生前

名前：日野井（ひのい）　慶（けい）

趣味：漫画、ラノベ、ゲーム、料理、格闘技など

好きなもの：趣味と同じ

嫌いなもの：歪んだ感情を持つやつ、卑怯の度が過ぎるやつ

性格：冷静さと熱血さで半々という感じ

能力：『あらゆる事を極める程度の能力』
　あらゆる事に対する適性を持つ事ができ、試行錯誤する事によりあらゆる事ができるようになる。
　また、あらゆる事を強化でき、強化効率も上がり上限もなくなる。
　常時発動で、無意識に習得、強化している場合もあり。

『理想の主人公設定で転生する程度の能力』
　転生時のみ有効な能力。
　簡単に言い換えると転生時にあらゆる設定を付加する能力。または、設定に変化する能力。

※能力名は仮です

備考：身長１８０ｃｍ、体重６５キロ、服の上からなら触れば明らかにわかるほど筋肉がついている。細マッチョ？

容姿は目が切れ長前髪が若干片目にかかっている。長さは肩にかからないくらい。
イケメンでニコポ、ナデポ、天然、鈍感を習得済み。
転生前もこのせいでいろいろあった。
さらに能力によってより拍車が掛かる。
　言葉遣いがその時の雰囲気や機嫌なんかによって変わる。

転生後

名前：上条当麻

趣味：同じ、不幸？

好きなもの：同じ

嫌いなもの：同じ

性格：やや上条当麻に引っぱられているところはあるが、基本的には同じ

能力：『あらゆる事を極める程度の能力』

『現実殺し（リアルブレイカー）』
　左手に宿る力
自然に発生する力を消し去る。
例えば、地面に触れて地面の硬度を消し去れば（０にすれば）硬度が無くなる。
だが、対象が大きすぎる場合に有効範囲がある。
主に触った部分から直径２ｍ。

消し去る対象は任意選択。
『幻想殺し（イマジンブレイカー）』の対。
力に段階があり。

『幻想殺し（イマジンブレイカー）』
原作の力とほぼ同じ。
『現実殺し（リアルブレイカー）』の対。
力に段階あり。

備考：身長１７５ｃｍ、体重６２キロ
筋肉的には転成前と同じ
　容姿は上条当麻を主体に転生前の容姿が混じった感じ。７：３ぐらいの比率。
　不幸スキルも合わさって、よりフラグが立つようになった。

主人公は主に幻想殺しと現実殺しを使います。　能力で習得した魔術も使いますがあまり使う事はありません。
ですが明らかに魔術というのをあまり戦闘では使わないのであって、物を創るだとか魔術かどうか判別しずらいものは頻繁に使うかも。
　あと、日常生活においても使います。

主人公設定（後書き）

次回から一話に入ります。

主人公が使える魔術については使い始めたらまた説明しようと思います。

高校入学。だから俺は寝る

ここは学園都市。

総面積は東京都の約3分の1に相当する巨大都市で、総人口は約230万人。そしてその8割は学生によって構成されている。

そしてこの学園都市において学生たちが行っているのは、能力開発である。

学園都市というからには、やはり学校の数の凄まじいものであり、上位の学校から下位の学校まで腐るほど建っている。

ここで話は変わるが今の季節は春、しかも桜も咲いている4月の前半である。

学年が上がるものもいれば卒業して、新しい学校で勉強するものなど様々な者がいるだろう。

そして今日は春休み明けの日である。街中には新しい制服を着て、これからの学校生活に期待を持つ者、緊張してやや硬くなってる者、不安を持つ者と、進学したであろう者の表情からはそんな感情が読み取れる。

つまり今日はどこの学校でも入学式が行われるのだ。

そしてここはその学園都市の学校の内の一つ。別に名門校というわけではなくどちらかといえばその逆に位置する高校だ。

そしてここにはある一人の学生が通っている。いや、正確にはこれから通い始めるのだが…。

その学生の名前は上条当麻。そう、我らが主人公である。

もちろん当麻が通っている学校でも当然のこと入学式が行なわれている。
今も新入生たちが体育館に集まり入学式を行っている最中であり、それを証明するかのようにこの学校の校長であろう禿げた人物が長々と挨拶をしている。

その長ったらしい挨拶に飽きてきたのか、体を　かくん　と揺らしながらも寝ずまいと必死に目を必死に開いている生徒もいる。

そんな中、当麻はというと…

「……ｚｚｚ…」

…下を向いて思いっきり寝ているのであった。

ｓｉｄｅ：当麻

いやーよく寝た。清々しいくらいの快眠だった。夜に普通に寝るよりもよく眠れたのでは？と思えるほど気持ちよ～く夢の世界に旅立てた。

というのもあの校長の声が、中年太りのハゲ親父に似合わないかわいらしい感じ眠気をさそう声だったのが原因だな。いい感じに子守唄になっていた。

俺だって最初のうちは真面目にやろうと思ってたんだ。

…ホントダヨ？

でも聞き始めて３０秒もしない内に眠気が来て、５０秒もするともうどうでも良くなっていて、１分もすると睡魔という強敵に意識をあっさり落とされていた。

だから仕様がなかったんだと言い訳させてくれ。

まあ睡魔の話はここで終わりにするとしよう。

さて、俺が眠っている間に入学式も終わり今は各クラスでホールルームの時間となっている。

だが俺たちの担任になるであろう人物が入ってきた時俺より前の席にいる青い髪のやつが「うほーーー！」だとかうるさいのなんの。

因みに担任の名前は月読　小萌だった。

あの合法ロリのお方です。
平行世界と言ってもここは変わりが無いらしい。

それから、自己紹介をしてある程度説明を受けたあと解散となった。

俺も帰ろうかな？と思った時に俺のところにある2人が話しかけて来た。

「なぁなぁ、君入学式で思いっきり居眠りしとったやろ？」

「そうそう、普通は最初くらい自重するもんじゃないかにゃー？」

そう言って話しかけて来たのは青髪にピアスを付けた担任の登場に騒いでた男と、金髪にサングラスとアロハシャツを装備している男、
そう、変態の青髪ピアスとシスコンの土御門　元春だった。
あ、自己紹介したのに青髪ピアスの本名聞き忘れた。でももういいか。

「…自重しろってゆーならお前らのその髪とピアスとグラサンとアロハシャツはなんなんだよ。それこそ自重しろよ。」

「あー、それを言われたら…」

「返す言葉もないにゃー。」

「まあそんなことはいいや。こうやって話すのも何かの縁だ。ホームルームでもやったけど改めて自己紹介するよ。
俺は上条当麻。呼び方は好きにしてくれ。」

「それじゃあ上やんって呼ぶ事にするわ。ボクの事は青髪ピアスって呼んでな。」

「土御門　元春。こっちも上やんって呼ぶことにするにゃー。」

「ああ、よろしく。」

「そうや、これからその辺一緒に回らへん？親睦の意味も込めて…」

「こっちは別に暇だからいいぜい。」

「俺も暇だからいいぞ。んじゃ早速いきますか。」

そうして一緒に教室を出てそのまま校外も出て行く。

回ってる途中、青髪が幼女を相手に喜々として話かけようとしていた。そしてそれに便乗する土御門のバカ2人を抉りこむように放った右で沈めて止めた。

路上で高校生が2人も沈められるのはやたらと目についたらしく、2人の足を持ってその場から引きずって早々に立ち去った。

ガリガリジョリジョリいっていたが気にしない。

2人を引きずったあとに、金と青の糸のようなものが大量に散らばっていたがそれでも気にしない。

その後目覚めた2人と共にまたその辺を回ってある程度いい時間帯になったので解散した。

学校初日はなかなか有意義だったと思う。

高校入学。だから俺は寝る（後書き）

やっと一話目を投稿できました。
遅くなってすいません。
次回は2話です。

主人公設定を少し弄りました。

あと、気がついていらっしゃるとは思いますが補足説明としましてプロローグで「あいつ」という表現が多々ありますが、「あいつ」というのは神（ゼウス）のことです。
念のため説明させていただきます。

俺は説教される側じゃない！

入学式が行われた次の日。
新しく一年生になるにあたっての最初の大きなイベントを終えた事により、新入生たちは多少の緊張が抜けたことだろう。

今日学校で行われたのは、委員会やクラス係り決め、身体測定などである。
だが今はそれも終わって一段落し、昼休みの時間となっていた。

教室内では前の学校からの知り合いどうしだったり、はたまた新しく知り合った者たちどうしだったり、それぞれが思い思いに会話している。

そしてそれは当麻に至っても例外ではない。
昨日の入学式後に知り合った青髪ピアスと土御門　元春と共にオタク談義に花を咲かせていた。

そんな特殊な会話をしている三人の元に、一人の女子生徒が割り込んで来た。

ｓｉｄｅ：当麻

「…というわけでボクが思うに女の子で一番魅力的なのは小萌先生みたいなロリ系であるということを…！」

「あまいぜ青髪！魅力的という事ならメイドの妹！さらにそれが義妹だったらというのが一番ぜよ！」

「お前ら性癖が特殊すぎるだろ！やっぱり日本人なら長い黒髪がだなぁ…！」

どうも、上条　当麻だ。

悪いが今の俺はとても忙しい。なぜならこの重傷末期患者2人に黒髪の女性の良さを伝えなければならないからだ。

え？お前も十分きてるって？

？　なんのこっちゃ？

は？　今度は何？少しは自重しろって？

…お前、ここにいる俺たちの3人にそんなもん求めてどうすんだ？

俺たちは自重なんて鎖からとっくの昔に開放された自由人（ニート）なんだよ。

俺は今この会話に存在価値を見出しているんだ。時間取らせんな！

「なんや2人とも？別にボクは2人の趣味を否定する気はないんやけど、ロリ一番説を否定するのはいただけへんな～…」

「そっちこそ、義妹メイドの良さが一番ていうのを理解できないとは、ヤル気なのかにゃ～？」

「はっ！いいぜ、お前たちが異常（アブノーマル）しか認めねーっつーなら、まずはその現実をぶち殺す？」

「ちょっと？そこのバカ3人？」

俺たちが己の主張の正しさを証明するための　聖戦（茶番）を始めようと構えるが、怒鳴り声によって横やりを入れられて萎えてしまった。

俺たちは声の主の方へと向く。

そこには長い黒髪で整った顔立ちをしていてからだの前で腕を組んだポーズで立っている女生徒が居た。

その女生徒俺も思ったことだが、多分隣の2人も思ったことだろう。

「…なぁ2人とも、どんな女の子が一番魅力的かって話題だったけど、俺やっぱり変えてもいいか？」

「奇遇だな上やん、義妹メイドも最高だか、この時ばかりは変えたくなってきたところだぜい。」

「なんやツッチーもか？実はボクもそう思ってたところや。」

「…やっぱり女の子で一番魅力を感じるって言ったら…」

「巨乳だな！」「巨乳やな！」「巨乳だにゃー！」

「あんたらいい加減にしなさない？」

「「「ぐはっ！！？」」」

直後凄まじい威力のパンチをもらった。

…

…

…

…

「…あの、まずあなたはどちら様でしょうか？」

あ、ありままに今起こった事を話すぜ。

この女生徒にパンチをもらったと思ったら3人揃って正座させられていた。

な…なにを言ってるのかわからねーと思うが俺もなにをされたのかよくわからねー…。

瞬間移動（テレポート）だとか時間操作とかじゃない…
もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…

「あんた自分のクラスのやつの事もわかんないの？私は吹寄。吹寄制理（せいり）よ。」

はい、皆さんなんとなく感づいていたとは思いますが、吹寄さんです。
別に俺、分からなかった訳じゃないです。会話を交わすのは初めてだったから一応名前を聞いといた方がいいかな～と思っただけです。

吹寄は原作でもあんまり登場してなかったから俺もあんまり性格を把握しきれてないところがあった。

実際に会ってみて思った事はだ、さっきもいったかもしれないが吹寄はホントにスタイルがいい。このクラスの女子たちと比べてもその差は歴然だ。
スタイルも良くて顔もいい。なのになんで吹寄から色気が1ミリも感じ取れないんだろうか？
美人に罵倒されるのが好きそうな青髪ですらなにも感じてなさそうだ。全く持って不思議である。

でも今そんなことはどうでもいいか。
問題はどうしてこんなことになってるかだ。

「では吹寄さんや、なんで俺たちはこんな状況になってんでしょうか？」

俺の言葉を肯定するようにで同じように正座している2人も「う

んうん」と言いながら頷いてくれる。

「そんなのはあんたたちが大声であんな変態トークしてるからに決まってるじゃない。」

「変態とは何や！ボクらは1人の紳士として「あぁん？」ヒィィ？すいません？」

物凄い迫力だったな。

直接睨まれた訳でもないのに脚がガクブルしてるぜ。正座してるけどね。

土御門も俺と同じ様な事になってた。

「だいたいあんたたちなんなの？その青い髪にピアスだったり金髪、サングラス、アロハシャツの三点セットは。あとあんた、入学式の時に寝てたわよね？少しは場をわきまえという事をぶつぶつぶつぶつ……」

殴られたと思ったらなんで今度は説教されてんだ？

というか普通そのポジションは俺のものだろうが…

「…なぁ上やん、この状況どうにかしてくれニャー…（ヒソヒソ）」

「はぁ？何で俺なんだよ…（ヒソヒソ）」

「そりゃあ上やん、自分黒髪ロングが好みって言ってたからやないか…（ヒソヒソ）」

「そうだにゃ～。それに今なら巨乳属性に風紀種も付いてきてお得だぜい…（ヒソヒソ）」

「別に俺はお前らと違ってそこまで執着してねーよ。さらにいまこの時にばかりは風紀種なんて欲しいとは思わねーよ。仮に上条さんの好みだったとしても、説教くさかったり手が出てくる女性はちょっと苦手何ですけど…（ヒソヒソ）」

「ぶつぶつぶつぶつ…ってさっきからあんたらさっきから何コソコソしてんの？」

「い、いえ！何もありまへんよ？」

「そ、そうにゃ～！何にもないにゃ～？」

「そ、そうですよ！別にあなたが少し説教臭いだなんて言ってま…あっ…」

「なっ？」

「ちょ？」

「……へぇ～…そう…」

失言した。

吹寄から口から声が聞こえた時には俺の体は教室のドアに向かってもう動き出していた。

人はものすごく熱い物を触った時、身を守るため先に手が引っ込みそれから熱かったと感じるものだ。

そのような現象を総じて反射というのだが、俺の体はまさにその反射によって行動していた。

頭の中にけたたましいほどの警報音が鳴り響いたのは、廊下に出た後だった。

２人も少し遅れながらも俺の後に続いて走り出した。

「逃がすかーーー！」

「上やん！なんてことしてくれんねん？」

「上やんのあほーー？」

ああ、なんていうかもうこれはあれを言うしかないよな…

学園都市に入ってから一度も言ってなかったけど、どうやら上条当麻という人間はこの言葉と共に一生を過ごすらしい…

大変長らくお待たせしました。

それでは皆さん、ご唱和ください！

せーの

「不幸だーーーーーーーーーー？？」

…　…　…　…

…

その後、俺たちと吹寄の追いかけっこは昼休み明けのチャイムが鳴るまで続けられた。

結果を言えば俺たちは何とか生き残る事ができた。

ある程度まで抑えあるが、能力で強化されていた俺をギリギリまで追い詰めるなんて恐ろしいやつだ。

あれか？怒りのせいで我を忘れて人間の限界でも超えたか？

でもまあ、何はともあれこれで明日の太陽を見る事ができる。

閑話休題

その後は放課後まで何もなく終わった。

今日は用事があり青髪や土御門たちと一緒に帰らず解散することに。

用事というのはまあ、買い出しだ。

この学校の近くのスーパーで夕市があるらしい。俺はそこで半額の卵を手に入れなければならない。

貧乏学生である俺にとってはどうしても見逃せない。

そうして急いで靴を履き替え学校を出た俺は早足のままスーパーへと向かう。

だがその途中なにやら大声で言い争いをしているだろうことがわかるものが聞こえた。
なるべく早くスーパーに向かいたかったのではあるが、どうにも気になって仕方がない。

携帯を使って時間を確認してみて、まだ少し余裕があることが分かる。
そう考えると言い争いが聞こえた方へと向き直りやや駆け足で行く。

現場と思わしき場所に着くとそこにあったのは、髪を金に染めたり耳にピアスつけたものだったりと、誰が見ても不良と答えるであろう男たちが5人。
そしてそのうちの1人によって羽交い締めにされ襲われかけている女生徒が1人という光景だった。

こんなものを見ちまったらもうスーパーがどーのこーのなんて言ってられない。

俺はその集団に向かって歩いて行った。

俺は説教される側じゃない！（後書き）

次回に続きの話をします。
まだしばらくインなんとかさんは来ません。

あと主人公設定で説明不足が結構あると思いました。
近いうちに変えようと思います。

あと、セリフで　その現実をブチ殺す　というのがありますが、左手に現実殺しを持っているため間違いという訳ではありません。

むしろこっちで行こうかな？とも思っております。または合わせるかもしれません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9247z/

俺が理想の主人公 -魔術と科学編-

2011年12月31日03時45分発行